

## 人生 100 年時代の歩き方インフル&新型コロナの処方薬が足りない…W 感染拡大への懸念、自宅で乗り切る漢方薬の底力

2023/10/17 日刊ゲンダイ

インフルエンザの患者数が右肩上がりが増えてきている。10月8日までの1週間では、およそ32万6000人。沖縄は「警報レベル」を超え、千葉や山口、大分、愛媛、東京など12の都県は「注意報レベル」だ。インフルの感染拡大は12月上旬にピークを迎えるとされ、新型コロナとの同時流行も危ぶまれる。そんな中、薬の供給が遅れているというから心配だ。

インフルエンザの感染者数は、全国にある約5000の医療機関から報告された数値が集計されている。国立感染症研究所などによると、10月8日までの1週間は、前の週より約2000人増えて4万9212人。1医療機関あたりの平均値は9.99人で、大流行の発生が予想される「注意報レベル」の10人に迫っている。

都道府県別の1医療機関あたりの患者数では、沖縄は30.85人で、すでに大流行が起きているとされる「警報レベル」の30人を超えている。以下、千葉21.08人、山口19.22人、大分18.00人、愛媛16.69人、東京16.44人と続く。

1医療機関あたりの患者数から全国の患者数を推計すると、1週間で約32万6000人になる。8月下旬から急増。感染のピークは例年より前倒しされ、12月上旬を迎えるとみられる。

一方、新型コロナについては、夏の第9波が収束傾向だが、増えては減って、減っては増えるのがこれまでの流れ。寒くなる年末年始に向けて新たな感染拡大が起こっても不思議はない。

ダブル感染拡大が危惧される中、心配なのが薬の供給遅れだ。日本医師会は今年6日、医薬品不足を巡る緊急調査結果（速報値）を発表した。全国の医療機関を対象にインターネットで医薬品の供給状況を質問したところ院外処方の医療機関5700のうち74%が「薬局から在庫不足の連絡を受けたことがある」と回答。院内処方の医療機関3000では、実に90%が「入手困難な医薬品がある」と答えているのだ。

### 上位10品目のうち8品目は咳止めと去痰薬

院外処方在庫不足の上位15薬品

1	メジコン錠15 <sup>ミリグラム</sup>	咳止め薬
2	アスベリン錠20	咳止め・痰を切る薬
3	フスコデ配合錠	咳止め薬
4	トルリシディ皮下注0.75 <sup>ミリグラム</sup> アテオス	糖尿病薬
5	アストミン錠10 <sup>ミリグラム</sup>	咳止め薬
6	ムコダイン錠500 <sup>ミリグラム</sup>	痰を切る薬
7	ムコダイン錠250 <sup>ミリグラム</sup>	痰を切る薬
8	アスベリン錠10	咳止め薬・痰を切る薬
9	トリプタノール錠10	抗うつ薬
10	フスタゾール糖衣錠10 <sup>ミリグラム</sup>	咳止め薬
11	オーグメンチン配合錠250RS	抗菌薬
12	レスプレレン錠20 <sup>ミリグラム</sup>	咳止め薬・痰を切る薬
13	PL配合顆粒	総合感冒薬
14	カロナール細粒20%	解熱鎮痛剤
15	カフコデN配合錠	咳止め薬

表は、院外処方在庫不足の薬のリストだ。1位「メジコン」（一般名：デキストロメトルファン臭化水素酸塩水和物）、3位「フスコデ」（同ジヒドロコデインリン酸塩）などは咳止めとしてよく処方される。2位「アスベリン」（同チペピジンクエン酸塩）、6.7位「ムコダイン」（同Lカルボシステイン）などは痰を切って排出しやすくする。アスベリンとムコダインには、小児用もあり、かなりポピュラーな薬だ。上位10

品目のうち8品目は咳止めや痰を切る薬だった。

トップ30までには、解熱鎮痛剤や抗菌薬もランクインしていて、総合感冒薬や風邪に使用される漢方として有名な葛根湯などもある。つまり、ダブル感染症の嵐に不可欠な薬がズラリと並んでいるのだ。

聖マリアンナ医科大学神経内科・元准教授の米山公啓氏は現在、「米山医院」の院長として患者を診察すると、薬は院外処方に対応している。その米山氏が言う。

「薬局に薬が入荷されるまでの時間も薬の種類やメーカーによって数日から2週間ほどとケース・バイ・ケース。規模のメリットで、個人経営の薬局よりは、大手調剤ドラッグチェーンの方が入荷が早いイメージですが、なんともいえません。入荷が正常化するにはかなり時間がかかりそうで、風邪やインフルエンザ、新型コロナなどの感染症対策には、インフルエンザと新型コロナを同時に検査できる抗原検査キットと市販薬を用意しておき、すぐに受診することなく自宅に対応するのが無難でしょう。その場合、市販薬については漢方薬は効果的です」

新型コロナも感染症法上の5類になり、インフルと同じ扱いで、自宅での療養期間はインフルと同じ5日になる。では、感染症の嵐を前に自宅に対応するには、どうすればいいか。米山氏に聞いた。

#### ■約3000円の同時検査キットでまず判定

まずインフルと新型コロナの同時検査キットは調剤薬局やドラッグストアのほか、ネットでも購入できる。料金は全額自己負担で1キットあたり大体3000円ほど。1箱に数セット入っていることもあり、その場合は1つ約3000円の個数分が料金だ。

咳や熱などの症状があつて同時検査キットを使用し、新型コロナもインフルも陰性なら、一般的な風邪の可能性が高い。高齢や基礎疾患など重症化リスクがなければ、特別な薬を飲まずとも、2、3日でよくなる。「それでも治らなければ、かかりつけ医に相談すればいい」という。

#### ■葛根湯、新型コロナの重症化を予防

心配なのは、新型コロナやインフルの場合だろう。その点についてはどうか。

「新型コロナの薬代は10月から1割負担で3000円、3割負担で9000円です。薬代が高くて拒否される患者さんが少なくありません。そういう方は、対症療法の薬で自宅療養になりますが、その場合に漢方薬が効果的なのです」

東北大病院のグループは、新型コロナ発症直後の患者を対象に漢方薬を使うグループと使わないグループに分けて、発熱緩和と重症化抑制を調べる研究を実施。使用した漢方薬は葛根湯（風邪の初期の発熱や頭痛などに使用する）と小柴胡湯加桔梗石膏（へんとう炎などによるのどの痛みや腫れに使用する）で、2つの漢方を使ったグループは、使わないグループに比べて有意に回復が早く、中等度1の患者の場合、呼吸不全を起こすリスクは漢方グループの方が低かったという。

福岡大のグループは、新型コロナの24歳女性に漢方薬の麻黄湯を服用してもらったところ、内服後に解熱。その後、発熱せずに回復したことを、日本東洋医学雑誌に投稿している。

新型コロナにおける麻黄湯の研究はさらに進む。麻黄湯と越婢加朮湯を併せて服用するのがより効果的だという。

インフルについても麻黄湯だ。順天堂大の研究グループは、A型インフルと診断された人に麻黄湯を投与するグループと抗ウイルス薬（タミフルかリレンザ）を投与するグループに分けて比較した。その結果、解熱時間については、有意差がなく、どちらも治療から2〜3日で大きく解熱した。意外なのは熱以外の身体症状で、関節痛については麻黄湯の方が有意に早く改善したと報告している。

### ■ 関節痛の改善効果も期待できる

インフルは高熱もつらいが、関節痛や頭痛などの身体症状もつらい。その点、解熱効果が同じで関節痛の改善効果は麻黄湯が上回るなら、わざわざ受診してタミフルなどを処方してもらっても必要もないだろう。しかも、タミフルなどには耐性問題もあるが、麻黄湯はウイルスの耐性を気にすることなく使えるから、より使い勝手がいい。

「新型コロナもインフルエンザと同じ5類になったことで、一定の療養期間は必要ながらも、2020年のパンデミック初期ほど深刻な病気ではなくなっています。ですから、高齢や持病などの重症化リスクがない現役世代が発症して検査キットで調べた結果、インフルか新型コロナが陽性のときは、これらの漢方薬で自宅で療養するとよいでしょう」

前述の通り、重症化リスクが高い人はかかりつけ医に相談を。元気な現役世代が検査キットや漢方薬をドラッグストアなどで購入するときも、使い方や服用方法、ほかの薬との飲み合わせについては薬剤師に確認することが重要だという。薬の供給が安定するまでイザというときに備え、これくらいの準備は必要だろう。